

斎藤 栄

TOKUMA NOVELS

長篇ミステリー

日本宝島殺人事件





TOKUMA NOVELS

斎藤 栄

日本宝島殺人事件

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四—四四三九二

Sakae Saitô ©1983

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

(編集担当 芦沢孝作)

ISBN4-19-152661-8

長篇ミステリー

日本宝島殺人事件

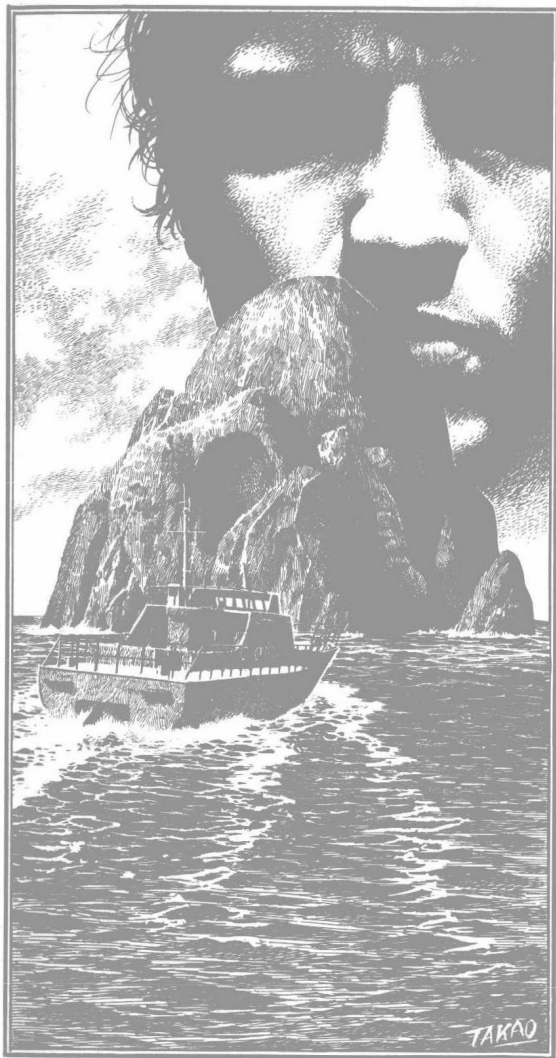
藤 栄



日本宝島殺人事件／目次

第一章	女が消えた	9
第二章	温泉宿の女	43
第三章	女の曲芸師	78
第四章	柔肌の地獄	112
第五章	泉島へ出航	146
第六章	激しい闘争	167
第七章	復讐の魔手	188
第八章	少年の危機	208
第九章	男達の反乱	229
第十章	連続怪殺人	249
第十一章	財宝の行方	270

口絵 加藤孝雄



第一章 女が消えた

1

初七日に、妹、由利子の遺骨を、宝蔵寺の墓地に埋葬した。

藤木昇にとっては、かけがえのない、たった一人の妹だった。

二十七歳で独身の藤木には、由利子は身の廻りの世話をしてくれる優しい肉親として、いつも温かい態度で接してくれた。

その由利子が、突然、暴走族の車に轢かれて即死したのだ。

歩道を歩いていたのに、そこへ突っ込んで来ての惨事である。

避けられなかった。

藤木は、そのしらせを聞いて、自分の耳を疑った。

次にカッと頭に血がのぼり、大いに怒った。けれども、いくら怒っても、どうにもなりはしなかった。

由利子を轢いた暴走族の十九歳の青年も、ハンドルを切りそこねて、電柱に激突。車は大破炎上し、その男も焼死してしまった。

暴走族が勝手に死ぬのはいい。しかし、罪もなく殺される者は、たまったものではない。

「可哀そうな、由利子……」

血だらけになって、転倒した由利子の手には、まだ、しっかりと買ひ物の手提袋が握られていた。

その手提袋の中には、藤木のために買った、白い男物のセーターがはいっていた。

死んでもなお、それを手離さなかった由利子のことと思うと、藤木はたまらなくなり、男泣きに泣いた。

「由利子……。おまえは、故郷の宇和島へ帰ってみたいと言っていたね。きつと連れていってやるよ」

藤木は、由利子の分骨した小さな骨壺に向かって話しかけた。

藤木と由利子は、四国の宇和島の出身であった。

今は、兄妹二人で、横浜へ出て来ていたが、義務教

育までは、故郷で受けて来たのである。

「宇和島へ帰って、あの牛鬼うしおにの祭を見たいわ。あの陽気さが、とても楽しいの」

由利子はそう言っていた。

牛鬼の祭というのは、真つ赤な牛の恰好をした大型のものと、棕櫚でつくった同じようなものを、若い者が担いで競り合う行事である。どちらも、牛というより、キリンか恐竜のように見えるが、由利子が言うように、明るい南国の祭の主人公にふさわしかった。

「いいさ。もう少したって、おれの仕事がひと息ついたら、一緒に行こうよ。おやじの墓まいりもしたいし……」

藤木はそう言っていたのだ。

彼は、横浜文芸新聞の記者である。

W大の仏文科を卒業して、どこへ就職しようかと、迷っていたら、W大のゴルフ部の先輩で、山川進という男が、

「おれのところへ来ないか。有能な記者を欲しがっているんだ。社は小さいし、地方紙だけど、社長がやる気充分だから、それだけにやり甲斐はあるぞ」

と誘ってくれた。

それで、藤木は、山川が好きだったために、

「はい。そうします」

と言ってしまったのだ。

自分が選んだ道だし、藤木は仕事に不満はなかった。彼は、はいると間もなく、学芸部の詩・短歌・俳句・川柳を担当させられた。

ほかの一般紙と違って、横浜文芸新聞では、学芸部はメインのポストだった。

横浜には、詩人では有名な山田今次などがある。

しかし、藤木は主として、俳人との接触が多かった。とにかく、仕事は楽しく、また、毎日の生活では、英語の通訳をしていた由利子が、必ず、朝と夜の食事づくりをしてくれたから、藤木は不自由しなかった。

そんな幸福な生活を、一人の暴走族が、いっぺんにぶちこわしてくれたのだ。

へなんということだ……

藤木は、女々しいくらいに泣いた。

由利子に、いい配偶者を決めてやり、しあわせな結婚をさせたいと、兄らしい気持を懐いていたのに、それはすべて画餅に帰してしまった。

由利子の初七日を過ぎても、何をするのも面倒臭か

った。

日頃、あまり飲まない酒も飲むようになった。

酒を飲んでも、由利子のことを忘れられはしなかったが、一分一秒でも、傷のことを考えないでいたいと思つた。

へ可哀そうな奴……

死んでしまえば、もう、何もしてやれないと考えると、胸に千本もの針を刺し込まれたように痛みが走つた。

人間というのは、生きていなくてはならないものだ。生きていてこそ人間の栄光も喜びもある。あの愚かな暴走族の青年は、おのれの愚かさゆえに、二人の人間の生を奪い……そして、おれの幸福までも壊したのだ、と藤木は思つた。

2

その晩も、藤木は、午後六時に、もう帰宅して来た。山川が、

「おい。妹さんが死んだくらいで、いつまでもくよくよするなよ。人生、ゴルフと同じで、OBが出た後、

ナイスショットが続くものだ。今夜にも、美人の彼女が現われるかもしれないぜ」

と言つた。

山川は、先輩として、藤木を慰めるつもりだったのだろう。しかし、藤木は、妹が死んだくらいと言う言葉にひっかつた。

へ由利子は、世界で一番いい妹だったんだ。優しく、素直で、可愛らしくて……。あれと同じ女がこの世にいるものか……

そんな風に、肚はらの中で舌打ちし、山川の顔もロクに見ないで、そこそこに帰宅したのだ。

彼の住んでいるのは、分譲マンションで、ヘロワイト・チェリーという名であつた。

八階建の六階609号室である。

帰宅したとき、すでにビール二本と酒を二合ほど飲んでいた。だから、すっかり、いい機嫌で、ドアをあけ、

へやっと、戻つたな

と思つた途端、どつと疲れが出、酔いも廻つた。ドアに鍵をかけるのも忘れ、そのまま、ベッドの中へ倒れ込んだ。

どのくらい、そうしていただろうか。

フト目を醒ました藤木は、強い咽喉の渴きを覚えた。
へ水を飲もうか……

我に返った藤木は、足をふん張って、キッチンへは
いつていった。2DKの狭いマンションである。

コップで、ガブガブ飲むと、実に旨い。いわゆる酔
いぎめの水の味だった。

この時である。不意に、入口のドアのノブを廻す音
がして、なんの断りもなく、誰かが侵入してくる気配
がした。

藤木は、自分がドアに鍵をしなかったのを思い出し
た。

テレビの上のデジタルを見ると、午後十一時を表示
していた。

「誰？」

反射的に、声をかけて、入口へ行くと、驚いたこと
に、そこに一人の若い女が、息を弾ませてはいり込ん
でいる。

黒っぽいレースのワンピースを着ている。

だが、藤木の心臓が、更にドキッと高鳴ったのは、
その女が、死んだ由利子そっくりだったことだ。

思わず、

「由利子！」

と言ってしまいたかったくらいだ。

しかし、よく見ると、髪が由利子よりも長く、瞳は
大きかった。

「助けて下さい。悪い男に追われています。匿かくまってい
ただけませんか……」

女は、弾む息で言っている。その言葉には、芝居気
はなく、今でも、ドアをあけてその男が侵入してくる
のを恐れる様子が、ありありと分かった。

「早く……はいりなさい」

藤木は自分でも、理由も分からずにそう言っていた。

「はい。ありがとうございます」

言うより早く、女は、黒いハイヒールを手にとって
走り込んで来た。

藤木は、ドアの錠を、内側からおろした。

その瞬間、廊下を走る男の靴音がした。続いて、低
いドスのきいた話し声が聞こえた。

「この階より上へはいってねえはずだ」

「どこかへ飛び込んだかな……」

「構わない。開けてみる！」

こんな物騒な会話の後、次々に、部屋のノブを廻して歩く気配がした。

藤木のところも、ガチャガチャと、乱暴に動かしたが、藤木は黙っていた。

六階のマンション住人の中には、この非礼で無法な男達の行為に、ドアをあけて、食ってかかった者もいたが、

「なんだと！ 深沢組に文句があるのか！」

と凄まれて、そのまま、引っ込んだ様子だった。

3

部屋では、若い女が、ベッドのそばの椅子に坐って、小さくなっている。

「大丈夫だとは思いますが、しばらくは動かない方がいいでしょう。灯も消しておく方が安心だと思うので、スモールランプひとつにします」

藤木は、およその事情がつかめたので、この女を保護してやろうと思った。灯をスモールにチェンジする直前、じっと女を見た。

へよく似ている……

女は、本当に、死んだ由利子そっくりであった。

「すみません。突然、飛び込んだりして……。ご迷惑をおかけしますわ。でも……殺されと思ったので……」

と、女は、ねっとりした甘い感触の声で言った。その声は、かすかな震えさえ、感じられたが、それだけに、一層、男心をそそった。

「相手はやくぎですか？」

「はい」

「どういうことなんですか？」

藤木は、新聞記者の端くれとして、興味を感じた。

「ごめんなさい。喋りたくありませんの。……怒らないでほしいんです」

「そうですか。じゃ、訊きません。お名前は聞かせてもらえますか？」

「私……都丸夕子と言います」

「ほう。珍しい名前ですね」

「苗字のことでしょうか？……これも説明は……」

「できないのですか。ハハハ……まあ、いいでしょう。しかし、今夜は、ちょっと、このままでは帰れませんよ。第一に、あの男達は、あなたがこのマンションに

飛び込んだのを知っている。あなたは、ここの住人じゃないですね？」

「はい」

「すると、遅かれ早かれ、あなたは、このマンションから出て行かなければならない。それを知っていれば、必ず、張り番をおきますよ」

「どうしましょう。私……帰れなくなるわ」

「たったひとつ、方法があります。おそらく、それしか逃げる方法はないでしょう」

「教えて下さい」

夕子は、黄色いスモールランプの照明の中でじっと藤木を見詰めた。

「このマンションの入口は、十中八、九、見張られています。とすると、ちょっと……この紙を見て下さい」

藤木は、テーブルの上に、社の用箋を広げ、記者用の鉛筆で、ヘホワイト・チェリーの見取図を書いた。

「逃げ道はあるんですの？」

「そうです。このマンションの地下は、隣の第九商事と共通なんです。というのは、マンションの建設者が第九商事なので。分譲ですから、普段は、鉄のシャッ

ターがおりていて、行き来ができません。けれども、毎朝五時から六時までは、清掃業者が、二つのビルから同時に、塵芥を搬出します。そのために、シャッターがあきます。そのとき、隣のビルに逃げ込んで、そっちの出入口から脱出するんです。彼等は、そのことに気がつかんでしょう」

藤木は取っておきの策を教えた。

「まあ、素敵。それなら大丈夫ですわ。ありがとうございます」

夕子は初めて嬉しそうに言った。

「さて……今夜は、ここでお休みなさい。ベッドはあなたにあげましょう。ぼくは向こうの和室で寝ます」

「とんでもないわ。あなたのベッドを……」

「いいんですよ。それから、ネグリジェもお貸しします」

「奥さまのですか？」

「いや……。死んだ妹のです」

「お亡くなりになったの？」

「一週間くらい前に、暴走族にやられたんですよ。可愛い奴でした。実は……こんなこと言っていないかどうか……あなたは、その妹の由利子にそっくりなんです

す」

「私が？ まあ……それでは、きつと亡くなられた妹さんが怒りますわよ。私は美人じゃありませんもの」
少しずつ、心がひらけてくるらしく、夕子は、唇をすぼめて笑った。

「お世辞でもなんでもなくて……。まるで、妹が生きかえって、そこに坐っているみたいだ……」

と、藤木は溜息まじりに言った。

「そんな風に、あなたがご覧になるからですわ。失礼ですけど……」

「あ、ぼくの方を、ご紹介しなかったな。ぼくは、横浜文芸新聞の藤木と言います。藤木昇です」

「新聞記者のかたでしたの」

「そうです」

「じゃ、こんな変な女のこと、関心を持って、お書きになりたくなるでしょう？」

「それが……どうも、調子が狂っちゃうな。妹の由利子みたいな気がして、職業的なカンが働かなくなりそうですよ」

「本当ですの」

「ま、信じなくても構わないです。とにかく、着替え

てお休みなさい。今、由利子のネグリジェを出して来ます。あなたが着替えてる間、ぼくは窓から外を警戒していきましょう」

藤木は、由利子のドロワーズの引出から、彼女が愛用していたピンクのフレイヤー付のネグリジェを持ち出して来て、夕子に手渡した。彼女がベッドルームで着替える間に、藤木はダイニングの窓から、そっとカーテンを動かして路上を覗いた。

黒っぽい見えない車が一台、マンションの正面にとまっていた。

へいるな……奴等」と思った。

追っ手は、かなり粘っこく、夕子を狙っているのだ。どんな経緯があつて、なんのために彼女を捕えようとしているのだろう。藤木は知リたかったが、今それを訊くムードではないと思った。

「すみましたわ。どうぞ」

隣室のドアが開いて、ピンクのネグリジェに着替えた夕子が現われた。ネグリジェの下にはわずかな布しか身につけてなかった。思わず息を呑むような豊満な女体が、透けて見えた。